
囚人服の魔法使い

飴引き

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

囚人服の魔法使い

【Nコード】

N7048H

【作者名】

飴引き

【あらすじ】

「無期限拘束幽閉」の判決を受け、世界で一番くらい場所に閉じ込められた少年。数年後、少年が連れてこられた場所は「魔法学校」。拘束服を身にまとい、力を封じられた少年の奇妙な学校生活が今、幕を開いた…

プロローグ 絶望の前の絶望（前書き）

この小説は架空世界の物語です。

プロローグ 絶望の前の絶望

「^{フェレス}神の名において、この者に裁きを下す」

あの日、演出づくめの荘厳の中で僕に言い渡された判決。

「—この者を」

それはひどく正しいもので。

「無期限拘束幽閉の刑に処する」

きつと僕は二度と最後の時までこの世で一番暗いこの場所で空を想うのだろう。

そう、思っていたのに。

そう、信じていたのに。

そう、願っていたのに。

どうして今僕は、また空を見つめているんだろう？

ブログ 絶望の前の絶望（後書き）

初めての連載小説なので緊張しています…

感想、評価大歓迎です。

誤字、脱字もお知らせください。

第一話 始まりは拘束服とともに（前書き）

この話は架空世界のものです。

第一話 始まりは拘束服とともに

事の始まりは、凍えるような冬の日のこと。

…だと思つが、いまいち自信が無い。

常に肌寒い地下十三階で、外も見ることが出来ない状態で季節を判断するのは困難だ。

そう、ここはハルケオン王国最北に位置する監獄、チエクム監獄。

その地下十三階、無期限監獄幽閉者のみが投獄されている通称「災厄の間」

僕はその住人だった。

ここに来た者は数ヶ月で廃人となる――…

そういつた噂が現実となるほど、ここは暗く、静か過ぎる所だった。

看守の持つランプ以外に灯りは無く、牢と牢の間は遠い。

逃亡を防ぐためなのか、静けさに囚人たちを食い殺させるためなのか、僕には解らない。

そんな静寂の中、僕はいつものように眠っていた。

その静寂が破られたのは、何ヶ月ぶりだっただろうか。いや、ここで正しい時間を求める者などありはしない。

それが何日振りであろうと、何年振りであろうと、それは関係の無いことだ。

僕らはこの場所で永遠を過ごしているのだから。

静寂を破ったのは、この一言だった。

「囚人S - 0049号、面会者が来ている」

鉄のような無表情で看守が言う。

「……………」

囚人S - 0049号は、ここでの僕の呼び名だ。

急に名前を呼ばれ、僕は眠りから覚まされて暫くのあいだ虚ろな目をそちらに向けた。

正直に言えば、発された言葉が理解できなかったというのが、一番の理由だと思う。

思考を殺し、いつも夢うつつのような状態を保つのが、僕の常だった。

そうでなければ、自分の罪のことしか考えることの無いこの場所では心が壊れてしまうから。

メンカイ…めんかい…面会？

僕に会いたいという人が居る？

「え…げほっ…」

聞き返そうとしたらむせた。久しぶりに声を出したからだ…恥ずかしい。

そこで僕はようやく言葉の意味を理解すると同時に、少し覚醒する。

…が、すぐに覚醒したことを後悔する。

また実験サンプル《モルモット》か…

義務とはいえ、僕は憂鬱とかすかな恐怖を感じる。

この国では

「無期限拘束幽閉」の判決を受けた犯罪者は人権を剥奪される。

では、どうなるのか、簡単だ。お国の役に立つのだ。

解りやすく言ってしまうば実験台。新しい魔具…魔法補助用具や、新薬、未知の物質対策などの事前実験に使われる。

犯罪者だから、誰も文句は言わない上に、投獄されるものはかなり魔力が高い者ばかり。

実験にはうってつけの材料といえるのだろう。

人を人と思わぬあの眼。

実験者達のあの眼を思い出すたび恐怖を感じる。

きつとあの眼は、かつての僕と同じ物だから。

面会者に会いに行くために支度をするうちに、僕はいつもと違うことに気づいた。

普段は魔法で軽い洗浄を施されたあと、足枷手枷の上に魔封じの札を貼られる。

その後小さな檻のようなものに入れられ運ばれるのが常だ。

だが今日は違う

普段より念入りに洗浄された後服を変えさせられた。

腕の部分からベルトが伸び、腰の辺りを一周している。

その根元辺りには大仰な金具。

拘束衣だ。

…僕はこれを着たことがある……いつかの実験のときに着たのだっ
たか……………？

まあいいか、長く動かなかったため腕の動かし方を忘れてしまった

かのような感覚に戸惑いつつ
着替えを済ます。

金具は自分では留められないので（留められるならば拘束の意味は無いといえる）看守が留め、上から魔封じの鎖を巻かれる。普段とは違い嚴重かつ丁重だった。

いつたい誰に会いに行くのだろう。

そもそも僕に面会するものなど居ないのではないか？

僕には兄弟も居ないし友人も失った。

両親は…

「つつ…！」

激しい頭痛を感じ、よろける。

両親は…死んだ。

なぜなら…

「行くぞ」

看守に言われ、僕は歩き出した。

思考は、中断した。

暫く進んでいると、他の牢が見えた。

前述の通り、牢と牢の間は広い。

次の牢が見えるまでも、一、二分はかかる。

僕が牢を通り過ぎようとした、その時だった。

「囚人S - 0049……」

掠れた声。こいつも他人と話すのが久しぶりなのだろう。

僕がそちらに眼を向けると、暗い部屋の中に男が見える。

僕と同年…だろうか？ここには自分の時を知るすが無いので解らないが。

男は掠れた声で、告げる。

「いや……シキヨウ・ユウ……」

「なっ……」

なぜ僕の名を？ああ、散々噂になった。きっとこいつは僕の事件の後に牢に入ったのだろう。

「何で知ってるかって…？とうぜん…だろ、お前は俺の…師匠なん

だからよ…」

「な…なにを…？」

僕は一步引いた。い、意味が解らない…こいつも狂ってしまっているのだろう。

実験で体を壊され、静けさに、暗さに、自分の罪に怯え、数日で自殺願望を抱き始める

だが拘束された状態では叶わず、先に死んでゆくのは…精神。

動けない永遠を前に、僕らは脆過ぎる。

ギリギリとした瞳で熱に浮かされたようにこちらを睨む男を見て、僕は自分の未来をそこに見たような気がした。

「おい、何をしている！」

「あ…すみませ…ん」

看守に促され、僕は再び歩き始めた。

ゆっくりと歩みを進めるうちに、長い廊下の端に着いた。

やはりおかしい、いつもは地下にある実験室へ連れて行かれるはずだ。

だが、今日は…まさか…

「このまま地上へ向かう。」

「え…！？」

「地上には結界が張られている。逃亡しようなどとは考えないことだ」

地上！？なぜ、僕は未来永劫この地下に幽閉されるのではなかったのか！？

混乱しているうちに、看守は何か…パネルのようなものを操作し魔力を通す。

すると廊下の突き当たりの部分、つまり壁が揺らぎ、扉が現れた。

「入れ」

看守に従い入ると、僕の視界は真っ白に染め上げられた。

「ようこそ地上へ、シキョウ・ユウ君」

澄んだ声が聞こえた。

第一話 始まりは拘束服とともに（後書き）

第一話、いかがでしたでしょうか？

まだ謎だらけですが、これから徐々に明かされてゆく予定です。
楽しんでいただけたら幸いです。

評価、感想、誤字脱字などありましたらばんばんお願いします。

監主と拘束服（前書き）

この物語は架空世界のものです

監主と拘束服

人間の瞳と言うのは急な光にあうと瞳孔が収縮する。

そんな理由で、僕の視界は真っ白だった。当然だ。何年も日の光を浴びていない人間なら、少しの光でも過剰に反応する。

この原因が魔光…魔法で起こした光なのか、ランプや蠟燭なのか、
…日光、なのか…僕には解らないけれど、とにかく僕には明るすぎるようだった。

涙が出る。

拘束衣のままでは眼を拭うこともできず、僕はそのまま声の主へと顔を向けた。

「誰ですか？」

眼を瞑り、涙を流したまま僕は問うた。恥ずかしいとは思わない。
囚人なんてこんなものだ。

「チエクム監獄総監主のヒトヤ・ロウだ。最初にここについての説明をした者だよ。…って覚えてないか。6年も昔だからな」

6年！僕が投獄されてからまだそれだけしか経っていないのか。

何もすることがないと時間は長くなるというが、まさかこれ程とは。

「お前ももう16歳か。早いものだな」

僕とは正反対な考え。普通なら6年と聞けばこんな反応を示すのだろう。

に、しても相変わらず囚人に向かってやけに親しげに話してくる。

最初に来たときもこの調子で、当時十歳だった僕は驚いたものだ。

少しおかしくないとこの仕事は勤まらないんだな、と失礼なことを考えていると、ようやく光に眼が慣れたのか、ぼんやりと景色が見えてきた。

ここは監主の部屋らしい。大きな本棚と奇妙な置物が部屋の隅に鎮座していて、部屋の中心に書類に埋もれた机が置いてある。その後ろに、椅子にもたれたロウさんがこちらを見ている。

赤毛をばさばさと立て笑っている姿はとても監獄の監主のは見えな
い。せいぜい町の気のいいチンピラ程度だ。

だがバカにすることなかれ。チエルカ監獄は国で一番大きく、もつとも重大な罪を犯したものだけが集められる中央監獄。

上級魔法習得、対魔術用体術、剣術などの厳しい試験を乗り越え監主にまで上り詰めたのだからただ者ではない。

今の僕など片手で鎮圧されてしまうだろう。

そんなことを考えているとロウさんが話しかけてきた。

「あいかわらず死んだような目してんな、美人が台無しだぞ」

「いや、僕男なのでその台詞はどうかと。それに目の生き生きした囚人はあまりお目にかかれないうんじゃありませんかね……」

久しぶりの会話がこれか。

ここで僕の容姿に触れてみよう

僕は七年前黒髪を肩で切りそろえたような髪に黒い瞳だった。となると今もそうだろう。あ、部屋の隅に鏡が置いてある。

七年ぶりに鏡で自分の姿を確認する。

変わらない黒髪黒目。日に当たらなかった肌は青白く、七年物の髪とあいまって幽鬼のようだ。

……言われてみれば女に見えなくも無い……というか女……？いや、髪のせいだろう。そうに違いない。

少し現実逃避を交えつつ視線を口ウさんに戻す。

「ところで今日は何故ここに呼んだんですか？」

「……………」

露骨に目をそらされてしまった。

「あの一……？」

「あ……えつと、な」

「もしかしてまた実験台ですか？いいですよ。今日は魔術実験ですか？それとも投薬？」

「うーん・・・まあ実験といえば実験なんだが」

やけに歯切れが悪い。なんだろうか。

「いや、来たほうが早い。行こうか」

どこへ、と言う前にロウさんは歩き出していたので、僕はあわてて着いて行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7048h/>

囚人服の魔法使い

2010年10月10日18時18分発行